S.　Ashina

＜前回：解放の神学／ファミニスト神学＞

形容詞の神学、文脈的神学

（１）フェミニスト神学の誕生

１．ユング：三位一体の象徴（キリスト教に規定された西洋文化圏における完全な自己の象徴）は完全(vollkommen)であるが、十全(vollständig)ではない。

女性や身体の理解のゆがみ、悪の問題におけるアポリア

２．1960 年代以前のフェミニズムが主として男性中心の社会システムにおける女性の権利獲得を目指していたのに対して、この３０年間のフェミニズムは社会システム全般に対する異議の申し立てを超えて､それを支え正当化している価値観や世界像の批判へと進み、文化や意識のレベルでの変革を追求するに至っている（大越, 1997）。

①キリスト教が直接的あるいは間接的に女性に対する不当な暴力に荷担し、それを正当化してきた点について｡例えば、魔女裁判の場合。

②キリスト教が男性優位の価値観を制度化し、構造的に女性の権利を抑圧してきた点について｡女性の聖職者への叙階に関する制限など｡但しこの制度化は意識的になされている場合だけでなく、無意識あるいは自動的に行われているものに注目する必要がある。

③男性中心の価値観の枠内における理想の女性像を女性に押しつけてきた点について｡自己犠牲的愛､謙虚さ､従順さなどを女性の美徳として奨励し ── イエスの十字架はこうした理想的女性の規範として使用される ── 、大胆に自己を主張し権利を求める女性を自己矛盾に陥らせる（つまり、自己規制を要求する)、あるいはこうした女性に対する他の女性の反発や攻撃を助長する。

④女性は自らの宗教経験を表現するにも男性中心の言語を用いざるを得ない。女性は自らの言語すら奪われている。

３．フェミニズムの問題提起　→　フェミニスト神学

フェミニズムの問題意識を共有しつつ、新しいキリスト教の形成を目指す神学運動として展開されている｡そこには､キリスト教の徹底的な否定論から伝統の再生論まで多様な議論が交錯している。

４．争点としての聖書解釈の問題（フェミニスト的聖書解釈）

「この探求の出発点は、共観福音書のイエスとの出会い、つまり彼について蓄積された教義ではなく、彼のメッセージと実践でなければならない｡」（Ruether, 1983,135）

日本におけるフェミニスト神学も、この聖書解釈という場を中心に展開してきた。

絹川久子『聖書のフェミニズム　女性の自立をめざして』ヨルダン社､『ジェンダーの視点で読む聖書』日本キリスト教団出版局。

フィリス・トリブル『フェミニスト視点による聖書読解入門』新教出版社。

５．対照的で代表的な論者として次の二人に注目

デイリ(Mary Daly, 1928-2010)とリューサー(Rosemary Radford Ruether ,1936-)

アメリカ、白人、リベラルなキリスト教という文脈、そしてこの文脈を超えた展開。

（２）デイリとリューサー

６．神が男性イメージ（家父長的で王権的）によってのみ語られている点に関して。

デイリ(Daly, 1973)は、イエスは男性であり、それゆえ女性の生き方の規範になり得ないと主張する ── イエスは過去の人物であり､現代人の規範にはなり得ない､そもそも人間は自分自身の人生を生きねばならないのであって､他人を規範とすることはできない ── 。

栗林「穏健で保守的なロマン主義の対極にあるのが、ラディカル・フェミニストの分離主義である」､「メアリー・デイリーは、男のジェンダーでもって神を語るキリスト教は抑圧的でしかないと全否定した｡」(96)

７．真の人間､規範的人間としてのイエスの否定であり､イエスの神性の否定をさらに超えた徹底的なキリスト教批判。

「イエスの十字架に集約された神の謙卑（ケノーシス）＝人間の、とりわけ女性の美徳としての自己否定、自己犠牲の模範」。これによって、女性の抑圧メカニズムを強化し、女性が自らの置かれた抑圧状況を不当なものとして意識化することをも困難にする。

十字架は父権的宗教が女神を殺害し女性に対する暴力を内面化するところに成立した象徴であって、そこにつるされたのは実はイエスではなく、女神だった。

８. リューサー：デイリの伝統的キリスト論の徹底的な否定論に対して、フェミニスト神学に至る思想系譜をキリスト教思想の伝統自体の中に再発見し、その過程でキリスト論の再構築を試みている。

９．リューサー（Ruether,1983,116-138）：思想史的アプローチ。

古典的キリスト論（カルケドン公会議の）は、贖われたメシア的王の思想と神と人間を結びつける神的知恵の思想とを基盤に成立した　が、その際に男性象徴（男性としてのイエス）が選ばれた。

↓

イエスという歴史的人物が男性であったことと、神の子あるいはロゴスが男性であることとの間に必然的かつ存在論的な関係があるという考えが派生

↓

女性原理が神象徴の中から排除される。

10．イエスの宗教運動から家父長的なキリスト論（正統キリスト論）の成立という 400 年以上のわたる歴史的なプロセス（キリスト論の家父長化）は、イエスの宗教運動からの変質であり、それは、他のキリスト論の諸様態の排除によって可能となった。

11．イエスの宗教運動に内包されたフェミニスト的キリスト論（女性の経験と相関しうるキリスト論）。

フェミニスト神学の聖書解釈は、まずイエスの宗教運動の中に男性優位イデオロギーとは異質な主張を再発見し、続いて正統キリスト論によって抑圧されてはいるが様々な仕方で生き続けてきた他のキリスト論を掘り起こす作業を行う。

↓

イエスの宣教した神の国は国家主義的でも彼岸的でもない。神の国は支配と被支配、抑圧と服従の構造を乗り越えるものとしてこの地上に到来する。イエスはメシア的預言者を王的にではなく、僕として象徴化する。イエスは当時のユダヤ社会において制度化されていた様々な差別抑圧構造と戦わざるを得なかった。

12．正典化のプロセス（←制度化）

多様な可能性の中より家父長的なキリスト論が正統キリスト論として公認され、それに伴って他のキリスト論の可能性は聖書テキストから排除され隠蔽される。

「キリスト教徒であるローマ皇帝は、キリスト教会と共に政治世界を支配する。主人は奴隷を、男は女を支配する。女性、奴隷、野蛮人は非ロゴス的で、精神のない者であり、神のロゴスの代理人によって支配され、規定されねばならない。キリストは、新しい世界秩序の全体的支配者となった。」（ibid.,125）

13．リューサーが注目するのは、神秘主義の伝統に見出される両性具有的キリスト論と、預言者的千年王国論的運動に見られる霊的キリスト論。

・イエスに女性的あるいは母的な属性を与える両性具有的キリスト論。その背後には、両性具有人の神話が潜んでおり、グノーシス主義のキリスト論から中世の女性神秘主義者（ノーリジのジューリアンなど）のキリスト理解を経て、近代のベーメやスヴェーデンボルグの神秘主義、そしてロマン主義に影響。

・モンタノス運動から中世のフィオーレのヨアキムの影響を受けた諸セクト（14 世紀のペギン会系のセクトなど）や 18 世紀のシェーカーの運動に至る預言者的運動においては、霊的キリスト論が展開されてきた。

「この種の霊的キリスト論は、過去の全くの歴史的なキリストと今も臨在する霊を区別しない。むしろキリストを、今現在、人間 ── 男も女も ── の中に顕わにされ続ける力と

みなす」（ibid.,131）。
↓

14.「支配－従属」のモデルに規定されないキリスト論（フェミニスト的キリスト論）の再構築。社会批判の視点。
「解放者として語るイエスの能力は、男であることに存するのではなく、この支配の制度を批判し、彼自身の人格の中に、奉仕と互いの法的権限を認め合う新しい人間性を具現しようとした、その事実に存するのである。……神学的に言って、イエスが男であることは、究極的な重要さを持たないと言えるかもしれない。それは、家父長的特権を認める枠組みの中で、社会的象徴的意味を持つだけである。この意味で、解放された人間の代表であり、解放を促す神の言葉であるキリストとしてのイエスは、家父長制のケノーシスと新しい人間性の宣言を顕わにする。この新しい人間性は、ヒエラルキーに基づく社会的地位の特権を捨て、低き者のために語る生き方を通して宣言されるのである。」（ibid.,137）

15.「キリストがもたらしたのは、女性と男性といった分け方をも乗り越える、「新しい人間性」なのである。解放者として語るイエスの能力は、支配システムを批判し、この新しい人間性を具体化しようとする姿勢に基づいている。解放された人間の代表であるイエスは、解放を促す神の語りかけをもたらすキリストとして新しい人間性を宣言する。」（張、2014、133）

16. デイリ：男性と女性の非和解的な敵対関係を前提とした「女性解放論」
リューサー：「女と男からなる新しい人間性」の実現という意味における「人間解放の神学」

17. フェミニスト神学は、「白人・アメリカ・中産階級・伝統的主流のキリスト教」を超えて、黒人の女性神学（ウーマニスト神学）やアジア、ラテン・アメリカの女性神学へと広がりつつある。
日本は？

６．解放の神学２――黒人神学

（１）解放の神学とその多様性

１．Christopher Rowland（ed.）, *The Cambridge Companion to Liberation Theology*, Cambridge University Press, 2007（1999）.

２．ラテン・アメリカの政治的解放の神学（カトリック教会）、フェミニスト神学、黒人神学、アジアの解放の神学（民衆の神学など）。
解放の神学の多様性は、現代における「罪＝抑圧」現象の多様性に対応している。
民族・人種、政治・経済、ジェンダー・文化
「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由の身分もなく、男も女もありません。」（ガラテヤ 3:28）

（２）黒人神学と社会的構想力

３．コーン**『抑圧された者の神』**新教出版社。

はじめに

「私は黒人神学の知的基盤を論じ、被抑圧者に対する神の解放に終始しないような、いかなる福音分析も「それ自身」非キリスト教的であることを、神学的に明らかにしようと努めてきた。」（1）

「ここではただ、そもそも神学者たちが自らの状況の諸限界を忘れて、自分たちはあらゆる所であらゆる人々のために語っているのだと思い上がる時にだけ、彼らの神学はイデオロギーと化し、したがって抑圧的・帝国主義的になるのだ、ということを指摘すれば十分であろう。欧米神学の多くは、たといそれが解放や自由について語っている場合でも、そのような性格を帯びている。」（6）

「すべての神学は特殊的なものであり、したがって、その特殊性によって限界づけられて

いるが、所与の特殊性が指示している真理は限界づけられていない。」
「解放という黒人神学の主題に耳を傾けることは、われわれの連関の中で自由の真理のために闘うということである。私が黒人性の具体性を強調するのは、その特殊性こそが、私の社会的・政治的連関の中で抑圧とは何であり、解放とは何であるかを、最もよく説明しているからである。」(7)

I 序論
「黒人の宗教と白人の宗教は本質的に同じものである。なぜなら、白人が黒人に「キリスト教」を紹介したのだから、というように仮定することは、もちろんの可能である。しかしながら、そのような仮定は、神学者から黒人の宗教的思考様式に対する生き生きとした洞察を剥奪してしまうことになるであろう。なぜならば、そのような仕方では、思考と社会的実存との間にある重要な関係を認識することができないからである。」(32)
「白人神学校の教授たちだけでなく、あの黒人たちもまた、白人的経験だけが神的事柄に関する問いと答えのための適切な文脈を提供しているのだ、と今まで確信してきたのである。彼らは自らの経験の狭さと、自らの神学的表現の特殊性を認識していない。」(38)
「私の論点は、われわれの社会的・歴史的文脈は、ただわれわれが神に語りかける問いだけでなく、その問いに対して与えられる答えの態様ないし形式をも決定する、ということである。」(39)

II　真理を語る
「黒人経験の神学的機能を探究すること」

神学の資料としての黒人経験
「黒人神学は、黒人経験の構造と形式を明らかにしなければならない。なぜならば、解釈の諸範疇は、黒人経験それ自体の思考形式から生起してくるものであるからである。」(42)
「それは教会的経験と同じ歴史的共同体から創出されたものであり、したがって、自らの夢と大望に基づいて生を形成し、かつ生きようとする、人々の試みを表現しているからである。このような黒人的経験に含まれるものは、動物物語、民話、奴隷の俗歌、ブルース、個人的経験の記録等である。」(51)
「黒人経験についてのもう一つの重要な神学的資料は、奴隷および元奴隷の物語、すなわち、黒人の勝利と敗北の個人的記録である」、「もっと最近の黒人文学」「ハーレム・ルネッサンス(一九二〇年代および三〇年代」の詩人たち、およびその後継者たち」「自由への闘いを指摘ヴィジョンで表現した。」(56)
「われわれ黒人神学者たちは、真理を「語る」ためには、黒人性についての真正の経験を提示しなければならない。」(60)

黒人経験・聖書・イエス・キリスト
「黒人神学の資料としての黒人経験は、伝統的なキリスト教神学の資料として同定されている聖書に対して、どのように関係づけられるのであろうか」(60)
「彼らは単に自分自身のことだけを取り扱っているのではないということである。彼らはもう一つの別の現実について語っているのである」、「黒人神学を単に黒人の文化史に解消してしまうことを防いでいるのは、この超越性の肯定なのである。黒人にとって、超越的現実とは、聖書が語っているイエス・キリストにほかならない。聖書は、イエス・キリストにおける神の自己啓示の証言である。かくして、黒人経験は聖書が黒人神学の一資料であることを要求しているのである。なぜなら、まさに聖書こそが、奴隷たちに、奴隷主たちのそれとは根本的に異なる神観を肯定することを可能ならしめたからである。」(61)
「イエス・キリストの証言としての聖書の重要性はだからといって、黒人神学が西欧キリスト教の伝統と歴史を無視してよい、ということを意味するものではない。それはただ、

その伝統についてのわれわれの研究は、黒人によって解釈されたような仕方での、聖書に啓示されたみ言葉の理解の光に照らして遂行されなければならない、ということを意味しているのである。」（62）
「われわれは初代の教会教父たちを、彼らがわれわれの現代的状況の危急的問いを提示していないという理由で批判することはできない」、「だが他方において、われわれに過去の信仰解釈者たちを評価することを可能ならしめる、人間経験における共通要素というものも存在する。」（62-63）
「神学の主題とは、神学的言説の厳密な性格を造り出し、そのことによって、神学的言説を他の言説から区別するところのものである。それとは対照的に、神学の資料とは、神学の主題を正しく表現せしめうる材料のことである。イエス・キリストは、黒人の希望と夢の内容であるゆえに、黒人神学の主題である。」（63）
「黒人性と神性とは、一つの現実性として弁証法的に結合されるのである。」（68）
「イエスを被抑圧者の解放者として見ることをしない、いかなる時代の福音解釈も異端的である。」（70）

Ⅴ　黒人神学とイデオロギー

「神学者たちが問わなければならない問いは、彼らの神学が社会的利害によって規定されているか否か、の問題ではなく、むしろ、「誰の」社会的利害、抑圧者か、それとも被抑圧者なのか、という問題である、聖書的立脚点からして、単に、イデオロギーとは神のみ言葉の、あるいは社会集団の願望との同一視である、というだけでは、間違いである」、「貧しき者の歴史的意識から生起してこない神学は、イデオロギーなのである。」（145）
「神学がそれについて語る、神的啓示は、人間的経験から引き出した、言語学的諸定式に閉じ込めてしまうことはできない。したがって、自らの思惟範疇の有限性を受容しようとせず、あたかも自分が全真理、しかも真理のみを知っているかのように語る、いかなる神学も、神冒涜、つまり、神的真理のイデオロギー的歪曲の罪を犯すのである。」（146）
「白人神学とイデオロギーとの同一視は、私の発生学的起源とは帰属を異にする同僚神学者に対する、無鉄砲なこきおろしとして、意図されたものではない」、「わずかの例外を別にすれば、これらの福音解釈者たちは、余りにも白人文化の社会的先験性に規定されているために、有色人種の解放はせいぜい周辺的命題であるにすぎない、ということである」、「特定な白人神学者の悪しき意図のせいであるよりも、彼らの思考がそこに生起する、社会的連関によるものである。」（147）
「キリスト教神学者とは、それゆえ、社会的実存と神的啓示との微妙な均衡関係に固着しつつ、福音解釈へのその解釈学的意識が、被抑圧者の自由の闘いによって、規定されている人のことである。」（148）
「解放の物語と神の物語との同一視は、人間的状況から引き出したものではない。キリスト教神学は、人間的必要性から神へと進行するのではなく、神の啓示からわれわれの必要性へと進行する。」（150）
「このような批判的問いについての決定は、彼らの自由への闘いの根源でありたもうお方の、出来事を通しての臨在に出会う際の、解放の闘いの中にある人々にこそ、委ねなければならない。」（152）
「真の検証は、われわれが、自由のための歴史的闘争において、同じ側につくように導かれるか否かに、かかっている。」（153）
「「客観的に証明する」方法は何もない」（153）
「だが、このような譲歩は、無制限的な相対性を肯定するものではない」、「超主観的な「何事か」は、物語において言い表わされるし、事実、物語において具体化されているのである。」（154）
「すべての民族は、語るべき物語、すなわち、彼らが自分の存在理由を規定し、かつ肯定する際に、自分自身と子孫たちと世界に向かって、自分たちがいかに考え、いかに生きて

いるかについて、語るべきなにかを持っている。物語は、無から有へ、非存在から存在へと移行する、奇跡を言い表わし、かつそれに参与するものである。」(154)
「われわれは、聖書物語は、われわれの主観的状態から独立している、それ自身の完全性と真理を持っている、と仮定しなければならない。われわれは、何でもかんでも、聖書物語の中に読みこむ自由を持ってはいないのである」、「彼の物語は、われらと共にいたもう、彼の臨在の恵みによって可能とされる信仰を通して、われわれの物語となるのである。」(156)
「彼らが述べた言葉を、真剣に聞くことによって、われわれは、われわれの現在の主観性から導き出されるのである」、「われわれ自身の時代と状況の外にいる、他者に耳を傾けることによって」(157)
「われわれ自身の物語がイデオロギー的になる、つまり、真理を聞くことを不可能にする閉じられた体系になるのは、われわれが、他の物語を聞かなくなった時である。」(158)

４．コーンの黒人神学における社会的構想力の問題
　　イデオロギー批判：福音の解放性・真理の歪曲、普遍性の偽装
　　物語の特殊性（自己同一性としてのイデオロギー）
　　とその複数性（他者への開放性）
５．社会的構想力：経験と聖書との間（二つの地平）
　　経験：個人と共同体　→　特殊と普遍
　　物語：解放、解放する真理、解放の物語　→　ユートピア
　　聖書：夢の素材そして規範、聖書を通した他者の物語への開放性
　　↓
　人間的現実性を構成する虚構の働き
　　小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会。
６．キリスト教神学（思想）の解釈学的構造：
　　思想主体と聖書的地平の歴史的地平、問いと答え。
７．Cornel West, *Prophesy Deliverance!　An Afro-American Revolutionary Christianity*, Westminster Jphn Knox Press, 1982.
　　, *The Cornel West Reader*, Basic Civitas Books, 1999.

＜参考文献＞

１．Anthony B. Bradley, *Liberating Black Theology. The Bible and the Black Experience in America*, Crossway, 2010.
　　, *Black Theology*, SCM Press, 2012.
２．Dwight N. Hopkins and Edward P. Antonio（eds.）, *The Cambridge Companion to Black Theology*, Cambridge University Press, 2012.
３．James H. Cone, *God of the Oppressed*, The Seabury Press, 1975.（コーン『抑圧された者の神』新教出版社。）
４．コーン『黒人霊歌とブルース　アメリカ黒人の信仰と神学』新教出版社。
５．コーネル・ウェスト『人種の問題――アメリカ民主主義の危機と再生』新教出版社、『民主主義問題――帝国主義との闘いに勝つこと』法政大学出版局。
６．M・L・キング『自由への大いなる歩み　非暴力で闘った黒人たち』岩波新書。
７．E・F・フレイジア『アメリカの黒人教会』未来社。
８．末吉高明『黒人文化と黒人イエス』日本基督教団出版局。
９．栗林輝夫『現代神学の最前線　「バルト以後」の半生記を読む』新教出版社。
10．宮平望『現代アメリカ神学思想　平和・人権・環境の理念』新教出版社。